そも〳〵丹前風と申は、中略風呂屋ありし時、勝山といへる湯女、すぐれて情もふかく、形とりなり髪のふり、よろづにつけて、世の人にかはりて、一流これよりはじめもてはやして、北廓へ出世して、不思議の御方までおもはれ、ためしなき女にはべり、又享保五年庄司富勝甚左衛門子孫が作の寫本洞房語園同名の板本あり、是は別本なり、卷三、承應明暦の比、新町山本芳順家に、勝山といふ太夫ありし、○中略髪は白き元結にて片曲のだてゆひ、勝山風とて今にすたらず、

片外

〔歴世女装考四〕片外（かたはずし）の權輿

髩つけ油なかりしむかしは、かの筋髩（すぢわげ）も兵庫（ひやうご）もみなむすび髪なり、片外も元來は結髪なり、そもそも髪の油いできしのち、髪のゆひぶり書見あまたあれど、大かたは戯場あるひは淫里の風を、いやしき市婦等が推稱て流行せたるなり、その中に獨片外のみは、四百年前、京都室町足利家の營中より起りて、今において下輩に移らざるは、いみじくめでたき髪の風にぞありける、さてその起りは、足利義政公東山殿ト云の北の方、妙善院殿の女中衆の事を書たる、簾中舊記群書類從卷四百十四武家部に、女中衆の髪の事をいふ條に、みやづかへせぬ時按に、御前へいでず、部屋にたる時なり、またみちなどゆく時、かもじ長くてわろきときは、按に、むかしは平日もさげ髪なる故かくいふなり、左たのゆひたる所を、右のかたにわなのあるやうに髪をわげて、さて下のゆひたる所に、べちのひつさきにてゆひつくるなり、ぬる時もよしとあり、是垂髪を假に片外にむすびおくをいへるなり、是ぞかたはづしの權輿なるべき、

夢想流

〔用捨箱下〕夢想枕夢想流髪

天和笑委集三年の記に、上野へ花見に出たつ女の事をいふ條に、○中略髪はかうがい、島田わげ、御所の女中の夢想流、おつ取かうがい、蒔繪櫛、ぼんぼり丸綿、わけよくかぶり、加賀の菅笠、つゞら笠、いとたくましき丸ぐけの紐、白きうねざし、袋足蹈、紫竹のざうり、ばら緒のせきだ、われおとらじと、さしも風流に出立といふ事あり、此文百五十餘年前の女の風俗を、今眼前に見るが如し、按るに、夢